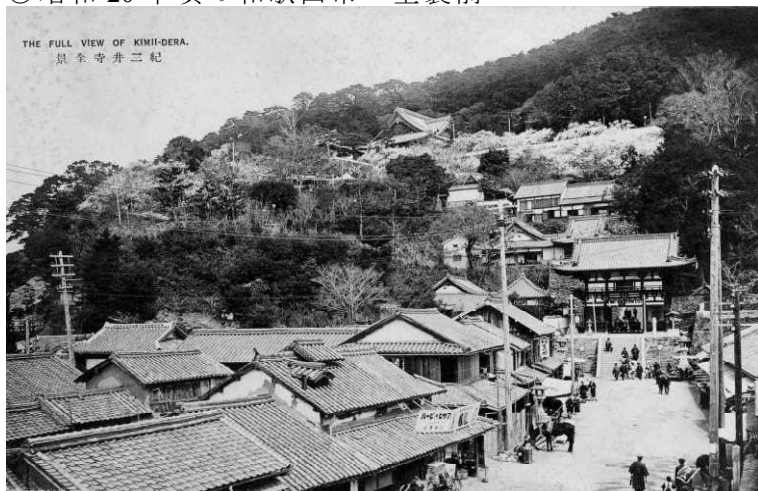


楠見便り 7月号

<和歌山大空襲>

○昭和20年頃の和歌山市 空襲前



○昭和20年頃の和歌山市 空襲後



1. 空襲等の状況

和歌山市では、昭和20年1月9日、1機のB29が突如、吉田、黒田の上空に現れ、250kg爆弾約10発を投下したのを最初、終戦前日の8月14日の松江地区住友工場爆撃を最後として、合計10数回の空襲を受けたといえます。

もっとも被害が大きかった7月9日のB29による大空襲は、1編隊が通った後、次の編隊が、さらに第3の編隊がまた落としていくといった風に文字通りの波状攻撃で、午後11時36分に始まり、翌10日午前2時30分まで、縦横無尽の猛攻撃を続けました。

なかでも、旧県庁跡(今の汀公園)の凄惨さは目を覆うものがありました。4,000坪の空地は、大部分畑地に耕され絶好の避難場所とされていただけに空襲となると人々は、争ってここに集まり、四辺から迫る火熱と黒煙を凌いだといいます。

やがて猛烈な旋風が起こって吹き付ける火災は白熱の渦巻と化し、石が飛ぶ、人が飛ぶ、立ち上がって走ってその場を逃れようとしても出来ず、助けを求める声は焼夷弾の爆音や強風の音に混じって凄惨でありました。夜が明けてから見る空地の光景は、壕(注)の中、散乱した土管の中、荒廃した畑地の至るところに死体が累々。窒息死したもの、衣服が焦げて半裸や、裸のもの、黒焦げのもの、骨ばかりになっているもの様々で、同所の死者は、本空襲による全市の死者の6割強(748人)を占めた事実から見てもその惨状が思いやられます。

大空襲による市内の火災は、7月10日朝5時ごろになって、大体燃えるものは、燃え尽くして、ようやく収まりましたが、これまで市の象徴として市民が見慣れた和歌山城の天守閣は、一夜にしてその姿をかき消しました。

2. 復興のあゆみ

和歌山市は、昭和20年の戦災で、市域の約70%を焼失、市街地は一望の焦土と化しました。この焦土を応急復旧する一方、将来を展望した新しい和歌山市建設を目指す戦災復興計画を樹立し、それまでの都市計画の欠点であった雑然とした市街地を明るく文化的で能率的な都市として再建することとしました。

戦災によって、一夜でその姿を消した和歌山城も昭和34年に再建され、市の象徴として再びその雄姿をあらわし、市民の喜びもひとしおであったといえます。

和歌山市も戦後73年を迎え戦災の焦土から落ち着きのある都市として立派に立ち直り、21世紀に向かって国際都市和歌山へと飛躍発展していくため着実に歩み続けています。

3. 次世代への継承

和歌山市では、毎年7月9日法要を開催しています。

戦争は、最大の人権侵害であります。改めて『命の尊さ』や『互いの違いを認める大切さ』を考えるきっかけとしてもらえればと思います。